

# 今日のシライ中

## 本の翼

白井中学校図書室から VOL.40

図書館指導員の先生が作ってくださった、図書室の掲示、見ていますか？今月2月は、日本を代表する二人の文豪の生まれたつきです。夏目漱石（1867年2月9日）、森鷗外（1862年2月17日）。ということで、二人の作品を紹介します。

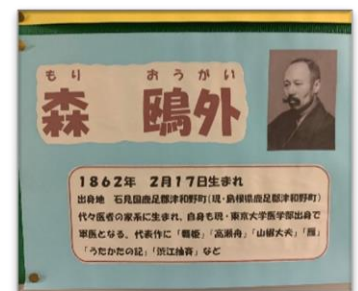
### 『こころ まんがで読破』 夏目漱石/ 『文豪ナビ』 夏目漱石 など

さすがに、名前は聞いたことがありますね？文豪、夏目漱石先生です。お札にもなった有名人なので、その容貌もご存じでしょう。難しそうな様子で描かれることが多いですが、例えば、文豪ナビの表紙には、「先生ったら、超弩級のロマンティストなのね。」とサブタイトルがついています。漱石先生が昔、英語の先生だったころのエピソードある生徒が、「I love you.」を「我、君を愛す。」と訳したところ、「そこは、月がきれいですね。とでもしておきなさい。」と言ったとか。昨今、話題に上った表現です。この一つを見ても、ロマンティストな人であったことがよくわかります。ります。さあ、「こころ」です。どんな作品だと思いますか？ありていに言えば、「静」さんというお嬢さんをはさんで繰り広げられる「先生」と「私」の三角関係の話です。文学作品に昇華した恋の結末。読んでみたくありませんか？「然し君、恋は罪悪ですよ。解っていますか。」（「こころ」）



### 『舞姫』など 森鷗外

三年生の国語で学習した「高瀬舟」。その作品のインパクトもさることながら、おまけで話した「舞姫」も気になった人が多かったですね。言わずもがな、漱石先生と双璧をなす、日本の文豪森鷗外先生を紹介しましょう。鷗外は、「陸軍軍医」という顔と、作家という顔と、二つの顔を持つ文豪です。いろいろなエピソードが残っていますが、たとえば、「舞姫」につながるエピソード。これは、自身がドイツに留学した際、向こうで恋人となった「エリス」との思い出が色濃く描かれた作品です。結局、鷗外は帰国し、後を追ってきた「エリス」は、鷗外の周囲の人々の説得を受け入れ、日本を離れます。本作は、「十九世紀末のベルリンを舞台にくり広げられる、激しくも哀しい青春の彷徨」です。（エリスの側に立ってみれば、…。という視点はもちろんありますよね。）そのほかにも短編から長編まで、たくさんの作品が残されています。少し言葉が難しいですが、挑戦してみてください。おまけのエピソード。薄幸の作家「樋口一葉」が24歳という若さで亡くなった際、最高の礼を尽くしてその死を悼み、葬列に加わったとされています。その姿を見て、近所の人々は、かの女子がいかに優れた作家であったかを知ることとなったのです。



「水清ければ魚棲まず」と昔から言うように、文学作品は、混沌と矛盾をはらんでこそ世界です。いつか、読んでみてくださいね。